INDEX

明るい街に	少子化対策に思う	（2015．5）
エッセイさまざま	人間考えることは･･･	（2015．6）
エッセイさまざま	「アッケラカン」	（2015．9）
平和を願って	一衣帯水	（2015．12）
読んだ見た聞いた	江戸時代の「赤ちゃんポスト」	（2016．2）
平和を願って	二度とこういうことは	（2016．4）
改憲論議をめぐって	「徳川の平和」と憲法九条	（2016．9）
エッセイさまざま	気骨の人	（2016．12）
平和を願って	防衛費1%枠	（2017．6）
平和を願って	衣鉢を継ぐ	（2017．9）
エッセイさまざま	フリーターと原発廃炉	（2018．1）
ワンダフルライフ	「老後」と「老入」	（2018．8）
明るい街に	ぬくもりのある地域	（2018．11）
読んだ見た聞いた	「読み直し」のすすめ	（2019．3）
エッセイさまざま	「レス化社会」の到来	（2019．10）
エッセイさまざま	「食べ物の大切さ」	（2020．2）
エッセイさまざま	「延命」か「縮命」 か	（2020．6）
エッセイさまざま	免許証返納の記	（2020．10）
平和を願って	幻の国歌「われら愛す」	（2023 ．4）

少子化対策に思う

松浦　昭　　（春日台）

以前大阪空堀界隈を見学する機会がありました。そこでのふれ合いは、まさに
私を 50 年前にタイムスリップさせるものでした。子供の頃住んでいた尼崎市の長屋では向こう三軒両隣をこえて顔なじみで、そこかしこから取り留めのない話し声が聞こえていました。夕食に秋刀魚でも焼こうものならば、周辺に知れ渡るような状況でした。「隣は何をする人ぞ」とは対極の世界でありました。空堀の人びとの他人をも受け入れる優しい眼差しや思いやりある会話は、小学生頃の体験と重なり合う部分がありました。

考えてみれば親やわれわれの世代は、そうした長屋からの脱出、戸建てやマンション生活を求めて邁進してきたように思います。長屋生活の濃密な人間関係は時として煩わしく感じられることもあったでしょう。プライバシーが保てないことに困惑することもあったでしょう。戸建てやマンションではそれらは軽減されたかもしれません。脇目も振らずに走り続けて到達したゴールで、しばしの安らぎ満足感に浸ることができました。しかし、来し方を振り返る余裕ができたとき、何か大事なものを忘れてきたあるいは失ったことに気づくのにそれほどの年月は必要としませんでした。煩わしいとさえ思っていた人とのふれあいが、なつかしく思えてきたのです。

現在も、地方の過疎化・消滅が進行しています。NHK クローズアップ現代「故郷が消える？地方の悲鳴」（2005 年 12 月 15 日）では、過疎に悩む村で神社の維持ができないとして、それを解体するシーンが映し出されていました。住民は季節の折々に神社に集い、秋祭りをはじめ多くの行事を村人総出で盛り上げてきたことでしょう。まさに神社は人びとのより所となっていました。忘れることのできない想いのいっぱい詰まった神社を解体することは、住民にとってさぞかし辛いことであったでしょう。神社の存在は、地域の結束を高める意味においてかけがえのないものでありました。解体は地域の崩壊に直結する出来事であったと思われます。われわれは、こうしたシーンと少子化とがつながりあるものだと考えます。

これまでの少子化対策は、あまりにも育児環境、労働環境、家庭環境等の子育てに直結する施策であったために十分な効果が現れなかったのです。半世紀かけておこなってきたツケを 10 年で返済しようとするのは、やはり虫がよすぎる話であります。迂遠と感じられるかもしれませんが、「地域力」あふれる地域づくりこそ肝要であります。「将を射んとせばまず馬を射よ」の例えもあります。直接的な子育て支援だけが少子化対策ではありません。ぬくもりのある風が穏やかに吹い

ている社会は、少子化対策だけではなく安全で安心できる豊かな人生に対する一つの解答でもあります。

人間考えることは・・・

春日台　　松浦　昭

獅子文六の名前の由来は、文豪の上をいくから文六と名づけたと言われています。 魚釣りの餌に「ゴカイ」というものがあります。これが数少なくなって高騰したため、人工的にこれに似せた疑似餌を作ったそうです。それの名前は「ロッカイ」です。あまり売れなかったようです。両者の思考回路は似ていますね。

江戸時代出島にオランダ商館がありました。そこに後世「出島の三学者」と呼ばれた人たちがいました。ケンペル、ツンベルク、シーボルトの三人です。驚くべきことに三人ともオランダ人ではありませんでした。商館には日本人の通辞（通訳）がいましたから、オランダ語を話せなかったらオランダ人でないことがばれてしまいたいへんです。さあ彼らはどうしたでしょう。本来はドイツ人であるシーボルトの話すオランダ語は、日本人通辞よりも発音が不正確であり怪しまれましたが、「自分はオランダ山地出身の高地オランダ人なので訛りがある」と偽って、その場を切り抜けました。干拓によってできた国であるオランダに山地は無いのですが、そのような事情を知らない日本人にはこの言い訳で通用したようです。同じドイツ人であるケンペルも、「山オランダ人」と偽ってぎこちないオランダ語の言い訳をしたようです。ツンベルク（スウェーデン人）はケープ植民地（南アフリカ）でオランダ語を身につけてから、日本に来ましたので心配はありませんでした。

同様の話が、アヘン戦争後の中国にもあります。東インド会社から中国のお茶の木をインドへ持ち出すように、密命を帯びた一人の英国人がいました。スコットランド出身の植物学者であり、プラントハンターとしても有名なロバート・フォーチュンです。中国の貴重な輸出品である茶（茶の木）を持ち出すことは厳禁です。しかも外国人が立ち入ることを禁止されている地域に踏み込んで調査しなければなりません。そこで彼は辮髪姿に中国服を身にまとい何とか中国人になりすまそうとしました。しかし、顔の特徴が中国人とはだいぶ違うことや彼らより 30 センチほど背が高いことを隠すのは難しいわけです。そこで、彼は万里の長城の向こうからやって来たと言いました。万里の長城の向こうに住む民族は非常に背が高く、すこぶる野蛮だと広く知られていたようです。彼は命の危険にさらされながらも、苦労して茶の木をインドに無事送り届けることに成功しました。

時代、場所は異なっていても、人間の考えることは似ていますね。逆に言えば「独創的な考え」を思いつくことは、たいへんな努力が必要であり、それだけ価値のあることです。

「アッケラカン」

松浦　昭　（春日台）

戦前において日銀引受による赤字国債の乱発が軍事費膨張を招いたという苦い経験から、戦後は健全財政を貫き、財源確保としての国債発行を抑制してきた。赤字国債を発行しないことが、財政当局の矜持でもあった。

しかし佐藤内閣は、1965 年度補正予算で東京オリンピック後の景気対策のために約 2000 億円の赤字国債発行にふみきった。ただし、これはあくまで特例であり、この年に限って認められた。

その約束はその後 10 年間は守られて安易な発行は控えられたが、75 年に再開され 90 年まで発行され続けた。91 年から 93 年まで好景気による税増収があったため、発行が一時見送られた。このあたりまでは、赤字国債発行をできれば回避しようとする政策意図を感じることができる。94 年以降はそうした思いも薄れ、赤字国債を当然のごとく発行し続けている。

さらに本来は 1 年限りの特例公債法であるので、毎年国会で審議されなければならないのに、2012 年度法案は 15 年まで 3 年間を一気に認めている。ここまでくれば、法案の趣旨も蔑ろにされ、現在は 65 年の 200 倍以上の 40 兆円を超える金額に膨らんでいる。

半世紀を経過すると、われわれの感覚はこれほどまでに麻痺してしまうのである。今や 1000 兆円を超す国の借金を、尋常の手段で償却できると思っている人は、ほとんどいないであろう。毎年税収に匹敵する借金をし続けているのであるから、財政健全化は空念仏にすぎない。人は易きに流れるものである。「アッケラカン」では、済まされない。

赤字国債発行の歩みをふりかえってみると、「方向転換」、「質的変化」の怖さをつくづくと思い知らされる。いかにその時は真剣に議論をし、歯止めをかけても、時間の経過とともにいつの間にか忘れ去られてしまい、思ってもみない化け物にかわる可能性があるのである。

戦時に発行された大量の国債が、戦後のインフレの中で紙くずと化したことも今一度しっかりと頭に叩き込んでおかなければならない。われわれは、歴史（過去）からもっともっと多くのことを学ばねばならない。

一衣帯水

松浦　昭　　（春日台）

秀吉は、文禄期、慶長期の二度にわたり朝鮮に対し侵略戦争を仕掛けた。これに明軍も参戦することとなり、東アジア全域を巻き込む戦争となった。とくに朝鮮では、兵士だけではなく多くの一般人が、犠牲となった。さらに生者からも、その耳や鼻を大量に切り取り、塩漬けにして秀吉のもとへ搬送するという残虐行為をおこなっており、日本に連れ去られた朝鮮人捕虜の問題も含め、人々の体と心に深い傷跡を残した。

このあと天下人となった家康は、秀吉の強圧外交は受け継がず、近隣諸国との安定外交をめざした。家康は、まず朝鮮との国交・貿易の再開を目指した。朝鮮との関係中断は死活問題であった対馬藩宗氏が二国間の仲介役を果たし、国書を偽造してまでどうにか朝鮮との国交回復にこぎつけた。

一方、日中関係をみてみると、日本は古くから遣隋使・遣唐使の派遣、仏教、儒教、学問をはじめ中国から多くの文化的恩恵を受けてきた。それでも、政治的に支配されたことも軍事的に制圧（元寇という緊張関係はあったが）されたこともなかった。決して両国は角を突き合わせてきた関係ではなかった。

徳川時代になると、互いに鎖国主義をとって国交を避けたこともあって、両国はいわば「国交なき交易」の時代を迎えたが、基本的には平和な関係が築かれていた。その背景には、この時代両国とも、統治の正当性の源泉は力ではなく、徳であるという文治主義を根幹に据えて国を治めていたからである。当時の西欧諸国が覇権主義のもと、植民地獲得競争に明け暮れていた姿とは好対照をなしている。

もちろん外交はこれだけでうまくいくほど簡単ではない。幕府は常に海外の動向に気を配り、交易の４つの窓口である長崎ではオランダ・中国、対馬の宗氏を通して朝鮮、薩摩の島津氏を通して琉球、松前氏を通して蝦夷に関する貴重な海外情報を収集している。近世日本は周辺諸国の政情に耳と目を閉ざすことなく、「徳川の平和」を実現していたのである。

今日のぎくしゃくした日中関係を見るにつけ、今一度「文治主義」そして日中共同声明（1972年９月）にある「日中両国は、一衣帯水の間にある隣国」という二つ言葉の持つ意味をじっくりと考えてみたい。

江戸時代の「赤ちゃんポスト」

春日台　　松浦　昭

熊本市にある慈恵病院が 2007 年 5 月に運用を開始した「赤ちゃんポスト」（正式名称：こうのとりのゆりかご）をめぐっては、子どもの命を救うシステムとして評価する立場と、子捨てや育児放棄を助長するのではないかと懸念する立場から、賛否両論の議論が展開された。

慈恵病院の「赤ちゃんポスト」は、ドイツの「赤ちゃんポスト」（ベビークラッペ）を参考にしたものである。しかし捨て子が多かったヨーロッパでは、中世から近世にかけて捨て子養育施設が各地に設立され、さらにフランスでは回転箱、イタリアでは小窓、ロシアではタンスの引き出しのような設置箱など、捨てる親の匿名性を保障した「赤ちゃんポスト」の仕組みも工夫されていた。

沢山美果子さん(『江戸の捨て子たち－その肖像』)によれば、天保2（1831）年津山藩（現、岡山県）の藩主となった松平斉民は、西洋書で見たロシアの捨て子養育施設である「育子院」や、「赤ちゃんポスト」にあたる「引出附の箪笥の如き箱」を津山藩に設置することを検討し、具体的な構想を町奉行に提出させている。担当の町奉行の転役と資金調達の困難から江戸時代の「赤ちゃんポスト」構想は実現には至らなかった。江戸時代後期の日本で、外国の「赤ちゃんポスト」の情報が伝わり、その設置が構想されていたのは驚きである。

「赤ちゃんポスト」をめぐる議論では、賛成する側も批判する側も、子捨ての問題を親、多くは母親の、また子どもの生命軽視の問題として語る点では似通っている。つまり産む女性の責任・モラルと、産み捨てにされる無力な命にしか焦点が当てられていなかった。しかし本書を読めば、子どもをどのような存在と考えるか、そして社会が子どもの養育についてどのようなシステムをもっているかという、子捨て・子育ての背後にある社会のありようとの関係でこそ考えるべき問題だということに気づかされるだろう。

二度とこういうことは

松浦　昭　（春日台）

10年ほど前に知覧の「特攻平和会館」に行きました。そこで3冊の本を買い求め、今でも折りにふれ読んでいます。そこに写った犬を抱いた純粋無垢の若き特攻隊員の姿を見る時、今も熱き思いがこみあげてきて涙腺がゆるみます。崇高な思いを胸に、大空に飛び立ち二度と戻ることのなかった4000人とも5000人ともいわれる若者達。

私は、かれらに対して尊崇の気持ちを禁じえません。それだけにかれらが後世のわれわれに、何を伝えたかったのかを学ぶことは、尊い犠牲を無駄にしないためにも大切なことだと思います。そのヒントは、かれらやその周辺の人々が残した文章の中にあるかもしれません。いくつか摘記してみましょう。

格式ばった遺書ではありませんが、

K少尉「『おいどんがうちんだちゅうて、だいが泣いてくりょか、おとーにおっかあ、あねいもと、裏の松山せみもなく』一度死んでみるべえ。こんなことはもう沢山だ。」

手渡された紙片には

N少尉「戦さのない国に生まれ変わり、良き先生として子供たちと手をつなぎあいたい。」

特攻の母と呼ばれた富屋食堂の鳥浜とめさんの言葉

「隊員の人達の多くは、戦争はしてはならない、平和な日本であるように、ということを言っていました。そして、そのことをできるだけ多くの人々に伝えて欲しいとも言っていたのです。」

特攻隊

元特攻隊員は出撃機上での思いを「人間の欲であろうか、又、死にたくない気持ちが頭をもたげる。死と生の心の葛藤である。」と記しています。

もちろん、O大尉「・・・皇国の安泰と永遠の光栄を祈りつつ・・・」といった内容の遺書も多数残されています。

これらを読むと、かれらが「戦のない国、平和な日本」を願っていたと思えてなりません。そうであるならば9条の精神を護り続けることは、かれらの願いとも太く繋がっていることになります。われわれの責任は重大であります。二度とこういうことは、繰り返してはなりません。

「徳川の平和」と憲法9条

春日台　　松浦　昭

柄谷行人さんは、「戦後憲法一条と九条の先行形態として見いだすべきものは、明治憲法ではなく、徳川の国制（憲法）です。」と述べている（『憲法の無意識』岩波新書、72 頁）。そして徳川体制と現体制の類似点として、「象徴天皇制」と「非軍事化」の二点をあげている。さらに「戦後日本に九条が定着したのは、それが新しいものではなく、むしろ明治以後に抑圧されてきた「徳川の平和」の回帰だったからではないか」（同前、194 頁）と、「徳川の平和」を評価している。

私は、この「徳川の平和」をもたらした要因について考えてみたい。

第一の要因は、言うまでもなく「鎖国（海禁）」である。これは正に侵略はしない、させないという不戦宣言である。その頃には国内が統一され、諸外国から一目置かれるプレゼンスを有していたからこそ「鎖国」が可能だったのである。

現在を「鎖国」の状態に戻すことできないが、過度のグローバル化を避けることはできる。閉ざしている門をノックする人の多くは強者（列強）である。家内にいる者は十分に注意しないといけない。

第二の要因は、財政難である。幕初は余裕のあった幕府財政も中期以降財政難に陥る。到底軍備の増強に充てるお金はない。もちろん、軍事大国にはなれない。そこで、幕府は各藩との軍事バランスが毀れないように武家諸法度、一国一城令などで各藩が武力強化することを厳しく取り締まっている。福島正則は、台風による水害で破壊された広島城を無断改修したことで、改易の憂き目にあっている。

各藩は紙幣（藩札）発行で財政難を凌ごうとしたが、幕府は最後まで紙幣発行を我慢し、鋳貨（金銀銅貨）で押し通している。それ故、貨幣発行量は貨幣素材供給量に制限を受けた。今風に言えば、最低限の財政規律があったといえるだろう。

これに対し同じ財政難に喘ぐ現政権においては、国債を大量に発行して防衛費 1%枠という節度も今年度の予算では危なくなり、「非軍事化」も画餅に帰している状態である。

手遅れ感、無力感を認めつつも、平和を孫子の代まで引き継ぐために、政策転換を強く望みたい。

気骨の人

春日台　　松浦　昭

今から約60年前、熊本県と大分県の県境にダムを建設する計画が持ち上がり、地域の人々は激しい反対運動を繰り広げた。世にいう蜂の巣城事件である。1964年に最後まで砦にたてこもっていた反対派のリーダー室原知幸氏（当時66歳）が警官隊に引きずり出され、この事件は収束に向かった。

この地域は富裕な土地で、日田杉の生長が良く、他にシイタケ、麻、茶などに恵まれていた。地区には山林労働を生業にしている人が多く、村がダムに沈むということは、父祖伝来の土地とそれまでの生活を失うということを意味していた。

室原氏は、資産十数億円の山林地主であったが、「俺が立って墳墓の地を水没から救おう。」と覚悟した。当初は、反対の気運は村中に広がり、「ダム反対」「守れ、墳墓の地」といった看板がたてられた。

しかしその後、先の見えない長い闘いに士気は下がり、住民の中から戦線離脱する者も多数出てくるようになり、室原氏は孤立を深めていった。

彼は、「（最初）から僕は1人になることを覚悟していた」と言い、反対闘争に多額の私財をつぎこみ、あらゆる方法を駆使して最後まで闘いを続けた。

1970年6月室原氏死去。葬儀には村を出て行った人、建設省関係の人も参列した。涙ながらに弔辞を読んだのは、彼と対峙していた当時の建設省九州地方建設局の所長であった。

彼の死後、室原家と和解が成立し、九地建は「その幅広い意見と批判は、貴重な経験、教訓として今後の建設行政に生かしてゆく」と表明した。 このように彼の生き様・真情は、立場を超えて多くの人々に深い感銘を与えていた。「土人」発言とは、まさに対極にあり、その想像力の無さに悲しみを覚える。

われわれは、彼の随想「下筌ダムと私の反対闘争」中の次の言葉をしっかりと心に留めておきたい。

「公共事業、それは理に叶い、法に叶い、情に叶うものでなければならない。そうでなければ、どのような公共事業も挫折する」

防衛費1%枠

春日台　　松浦　昭

防衛費については、三木内閣が 1976 年に国民総生産（GNP）比1%内に収める方針を閣議決定し、それ以降の歴代内閣も予算編成にあたって概ねこの枠を維持してきた。

政府は 1993 年、日本の経済力を測る指標を日本企業の海外支店の所得を含むGNPから、国内で生産された商品やサービスの価値の合計を示すGDPに変更した。それ以降 GDP 比が用いられることになる。防衛予算のGDP比は 2010 年度の 1.008%を除いて1%を超えない水準が続いた。

また、GDPの算出方法が、2016 年 12 月から変更されて、これまで除外されていた研究開発費を算入することになり、GDPが 3%程度上積みされることになった。防衛費もそれにつれて 1%枠を維持しつつ、上積みすることが可能となった。この変更は、看過してはならない。

2016 年度の防衛費の当初予算は 5 兆 541 億円となり、初めて 5 兆円を超えた。この年の GDP は、537 兆 2894 億円である。見かけ上は 1%枠におさまっているが、これに米軍経費負担を含めたり、補正予算を合わせたら、すでに1%枠は超えている。

それでも、安倍内閣は 1%枠が念頭にあるのかなと思っていたら、とんでもない発言が飛び出した。安倍首相は 2017 年 3 月 2 日の参院予算委員会で、「国内総生産（GDP）1%以内に抑える考えはない」「GDPと機械的に結び付ける考え方は適切ではない」と述べた。中国の国防費増加などの対外的な安全保障環境の変化に対応する必要性を強調した発言と受け止められているが、たいへん憂慮すべき発言である。

これは、長年堅持されてきた 1%枠が、もはや歯止めではなくなったことを意味する。さらに残念なことに、これに対するマスコミ、野党の反応が鈍い。マスコミを抑え、国会での 1 強状態では、以前であれば到底口にすることが憚られた内容も、飛んでくる矢はないと見越したような発言である。特定秘密保護法、安保法制、共謀罪、憲法改定等々、すべて同根である。

衣鉢を継ぐ

春日台　　松浦　昭

広島・長崎への原爆投下、終戦記念日と続くこの 8 月は、多くのマスコミで戦争体験者が戦争の悲惨さを語っていた。私の知るかぎり、すべての人が「戦争は絶対にしてはダメだ」と異口同音に述べていた。

今、手元に一冊の本がある。品川正治『9 条がつくる脱アメリカ型国家』（2006 年 10 月）である。品川氏はご存知の方も多いと思うが、経済同友会専務理事をも務めた財界のリーダーであるとともに、中国大陸最前線での戦争体験者でもある。この本のなかに「自分で戦争に行って、傷を負ってみろ」という言葉がある。参謀や高級将校に対する痛烈な批判である。

野中広務氏は、2017 年 7 月に「私みたいに戦争に行き、死なずに帰ってきた人間としては、再び戦争になるような歴史を歩むべきではない。これが信念だ」と強調し、憲法9条に自衛隊の存在を明記するなどの改憲案に反対を唱えた。彼は毀誉褒貶の定まらない人物であるが、この一点については信じてもよいと思う。

落語家・桂歌丸氏は、今年 8 月 5 日放送の「報道特集」（TBS 系）で、「戦争を知らない政治家が戦争に触れるな」「戦争を知らなかったら、戦争をもっと研究しろ」と政治家の戦争に対する無知を指摘している。

このように戦争を体験したほとんどの人は、戦争に強く反対し、現状に大きな憤りを覚えている。この人たちが大きな重しとなって、これまでは戦争への傾斜を押しとどめてきた。

しかし、いつまでもその重しの役割を、戦争体験者に負わすことはできない。残念ながら、品川氏は亡くなられたし、何よりも会の代表で 9 条の大切さを豊富な知識で説得的に訴えてこられた髙島仟氏を、われわれは失った。

衣鉢を継ぐとすれば、戦争体験はないが戦後の窮乏生活をおぼろげながらでも知っている戦後世代である。歴史を勉強し、どのような形であれ、自らの考えを外部（子どもたち）に発信していきたい。

戦争も戦後も知らない人間がリーダーとなることの恐ろしさを、もう我々は十二分に知ったのであるから、これ以上座視していてはいけない。

フリーターと原発廃炉

春日台　　松浦　昭

長い間ずっと気になっていることがある。

それは、フリーター（定義では 15 歳から 34 歳の若者）と呼ばれる人たちの老後である。

フリーターの高年齢化が進行しており、枠外の 35 歳以上の高齢フリーターも増加している。

彼らは確実にあと 20 年を待たずして、年金受給年齢に突入し始める。これは、不確かさを含む予測ではなく、確定している事実である。

その時、生きていくうえで最低限の年金を受給できる人たちは、それほど多くはないであろう。

政府が性別、年齢に関わらず無条件で、すべての国民に生きるのに必要な最低限の金額を支給するというベーシックインカムが論ぜられているが、今日の財政状況のもとでは到底予算の裏付けはない。

責任ある道筋が示されていないのである。このまま手を拱いて何もしなければ、近い将来に訪れるであろう現実の恐ろしさは容易に想像がつく。

長期ビジョンの無さを示すもう一つの事例が、原発廃炉作業の期間と費用である。

英国では普通に運転をして普通に廃炉作業に入った小規模な原発であっても、廃炉に 90 年を要するといわれている。

東京電力が示した福島第一原発廃炉に向けたロードマップでは、事故を起こしたにも関わらず 30－40 年で廃炉が完了するとしている。福島県のHPでは、これをそのまま転載している。期限が近付けば、再延期するのは目に見えている。

費用についても、経済産業省自身が、福島第一原発の廃炉にかかる費用や賠償費用の総額が 21 兆 5000 億円に上りそうだとする推計結果を公表しているが、果たしてこれで足りるのであろうか。どのように調達するのであろうか。問題山積である。

長期ビジョンで思い出されるのが、2004 年に行われた年金制度改革の「100 年安心プラン」であるが、端から信じていない人も多かったが、見事に破綻した。これはビジョンとは呼べないであろう。

政治家は現在の有様が大事であり、20 年後 30 年後のことは真剣に考えていない。まともな長期ビジョンを示されていない国民は不幸である。

「老後」と「老入」

春日台　　松浦　昭

年を取ると、体力、知力そして記憶力と悲しいほどに減退してくる。「物忘れ」に関する悲喜劇は、みなさんの周辺でも数多くみられることでしょう。終活を考えると、モノへのこだわりも弱くなった。

このように失ったものは数多くあるが、それを嘆く必要はない。それを前提に「スローライフ」でいけばよいのである。

失ったものばかりではない。加齢とともに新たな面白い変化も生じている。

今春、新幹線から富士山を眺める機会があった。その時「富士山てなんと神々しいのだろう」と感じ入った。それまで幾度か富士山を見てきたが、美しい

と思ったことはあっても、神々しいと感じたことはなかった。

また、これまでしんどいことはできれば避ける傾向にあった。しかし今は、そうしたこともそれほど苦にならなくなった。むしろ、役目を果たすことができる喜びや、仲間との出会いに楽しさを感じるようになった。

若いころは「夢」は叶えるものと思ってきた。これも最近では、そうではなくて「夢」は「夢」として心のどこかに大切にしまっておくものと考えるようになった。

こうした心境の変化は、ここ 1、2 年のことである。新しい自分に出会ったようで楽しい。これから先、どのような変化が待ち受けているのか、大いに楽しみである。加齢も捨てたものではない。

今、日常語としてごく普通に使われている「老後」という漢語は、江戸時代にはほとんど使われず、それに当たる和語である「老入」（おいれ）の方が使われていた。56 歳で日本初の実測による地図を作成した伊能忠敬の頭のなかには「老後」という言葉はなかったであろう。

「老後」や「余生」には後ろ向きのｲﾒｰｼﾞがあるが、対照的に「老入」は前向きである。自らの意思で老境に入っていくのであるから、本人次第でさまざまな設計図を描くことができる。 できれば、私も「老入」スタイルで齢を重ねていきたい。

ぬくもりのある地域

春日台　　松浦　昭

かつて大阪空堀界隈を訪れたことがある。そこでのふれ合いは、まさに私を 60 年以上前にタイムスリップさせるものであった。その頃、尼崎市の長屋に住んでいたが、そこでは、向こう 3 軒両隣をこえて顔なじみで、そこかしこから取り留めのない話し声が聞こえてきていた。夕食に秋刀魚でも焼こうものならば、周辺に知れ渡るような状況であった。「隣は何をする人ぞ」とは対極の世界であった。空堀の人々の他人をも受け入れる優しい眼差しや、思いやりある会話は、小学生頃の体験と重なり合う部分があった。

考えてみれば親やわれわれの世代は、そうした長屋からの脱出、戸建てやマンション生活を求めて邁進してきたように思う。長屋生活の濃密な人間関係は時として煩わしく感じられることもあったであろう。プライバシーが保てないことに困惑することもあったであろう。

戸建てやマンションではそれらは軽減されたかもしれない。脇目も振らずに走り続けて到達したゴールで、しばしの安らぎ、満足感に浸ることができた。しかし、来し方を振り返る余裕ができたとき、何か大事なものを忘れてきた、あるいは失ったことに気づくのにそれほどの年月は必要としなかった。煩わしいとさえ思っていた人とのふれあいが、なつかしく思えてきたのである。

このような感慨は、私１人のものではなく、至る所でそうしたものを求める動きが出始めている。コレクティブハウジングが各地で建設され、長屋や町屋を評価する人々が増えている。価値観の多様化を端的に示す一文を紹介したい。

「都心で、地べたに近いところで暮らせる価値がどれだけ大きいか。そう思えば、いま話題の超高層の六本木ヒルズよりも、水平の長屋の方がずっと豊かじゃないか」。

人と人とのふれあいに満ちた地域、出会った人同士が気軽に挨拶ができるような、ぬくもりのある風が穏やかに吹いている地域こそが、老若男女を問わず今最も求められているものであろう。

その社会の建設は、実は 60 代、70 代の双肩にかかっている。その世代は、日常生活をどうにかこなせるだけの体力・知力があり、時間的余裕も少しはあるからである。本会に新しい会員を迎えることも、その第一歩であることに間違いはない。

「読み直し」のすすめ

松浦　昭　　（春日台）

この数年、来し方行く末に思いを巡らすことがある。その際、残り少なくなった行く末より、来し方をふりかえることが多くなった。

そのひとつの術として、以前に読んだ本の読み直しをしている。これは、自分自身を見つめなおすことにもなる。

島崎藤村『夜明け前』（1929 年）。これは近代日本文学の最高傑作のひとつである。主人公の青山半蔵のモデルは、藤村の父親・島崎正樹である。

徳川の時代が終わり、明治を迎える激動期を、半蔵をめぐる人間群像、西洋化に戸惑い苦悩する主人公の心を描いた小説である。

そして、もう一つ重要なテーマがあることに今回気づいた。

半蔵は山林の使用を制限する尾張藩を批判し、明治維新になれば自由な山林の使用が可能になるのではないかと強い希望を持っていた。しかし明治政府の施策は、尾張藩よりも更なる圧迫加えた「山林の国有化」であった。

山林を村民のために使いやすいようにしようとした半蔵の試みは、無残にも踏みにじられた。しかし、彼のこの考えは一世紀近く前に現代の「コモンズ論」を先取りしているように思える。コモンズは草原、森林、牧草地、漁場などの資源の共同利用地を意味する用語であるが、馴染みの言葉で言えば「入会地」である。藤村は、このことの大切さを切々と訴えていたのである。こうした先見的な考えを、小説の重要なモチーフとした作者の慧眼に敬意を表したい。

読み直しには新たな発見という喜びもあるが、これまで見過ごしていたディテールに気づくこともある。それは鈍行列車の旅に似ている。ゆっくりと進むので、車窓からの眺めを満喫することができる。若い時はストーリー展開を優先して、情景描写をなおざりにしがちであった。今回は先を急ぐ必要はない。季節の移ろいや町の賑わい、人々の心情等をいかに描いているかをじっくりと堪能することができる。

こうした作業は正解を求めるものではなく、時間をたっぷり持てるようになったシニアにふさわしい遊びであり、自らの心への問いかけでもある。

「レス化社会」の到来

春日台　　松浦　昭

薄々感じていたことであるが、その現実を目の当たりにすると正直少しショックを覚えた。切符やチケットを購入するさいに、スマホが便利であることは知っていたが、まだ窓口で購入する術はこれまでは維持されていた。しかし、先日友人と話をしているとフィギュアスケートのチケットは、スマホ限定であると知った。私はフィギュアスケートのファンでもないし実質何の影響もないのであるが、今後この趨勢は衰えることはないだろう。

つい最近、高速バスの予約をした。主流はスマホ決済であったが、かろうじてPCで予約内容をプリントしていけばよかった。早晩ここもスマホ限定になるのではないだろうか。

このようにチケットレスへの移行は、どんどん進行していて、スマホに不慣れな人間にとっては不便さを感じる時代が忍び寄ってきている。

実は来し方を振り返った時に、同じ現象が生じていたことに気づく。切符についていえば対面販売から自動券売機になり改札も自動改札になった。銀行では ATM が普及し、ハンコ片手に窓口を利用する人は少ない。

われわれの世代はどうにかこうした変化に順応してきたが、祖父母の世代は戸惑いを感じていたに違いない。しかし困ったことがあれば駅員、銀行員さんに聞くことで乗り切ることができた。かれらは、時代の流れに逆らうこともなく、静かに暮らし続けていた。

しかしその後に激流が襲ってきた。PC・インターネットの普及である。これはハードルが高く、乗り遅れる人も多くいた。情報を十分吸収することができない情報弱者を生み出した。シニア世代はPC・インターネットの普及率が低く、さまざまな面で不利益を蒙っている。

PC・インターネットによる情報格差を、スマホが緩和していることは認めなくてはならないだろう。今度はそれに乗り遅れた者（私）が、情報弱者になろうとしている。まさに「歴史は繰り返す」である。そうなってみて初めて祖父母の気持ちの一端を知る思いがする。

「レス化社会」のもう一つの特徴は、キャッシュレス化である。ただし「レス化社会」という言葉は市民権を得ていない私の造語である。「レス化社会」は対話なしで目的が達せられ、人と人との生のつながりが希薄になるようで不安でたまらない。穴埋めとしての人工音声では、味気ない。

「食べ物の大切さ」

春日台　　松浦　昭

最近、「食べ物の大切さ」を再認識するきっかけとなった二つの出会いがあった。

その一つは、遅ればせながら井上ひさし『吉里吉里人』（1981 年刊）を読んだことである。

扱われているテーマは多岐にわたっている。当時、日本が直面する医療、安全保障、教育、政治、経済等あらゆる課題を俎上に載せている。当然、彼が大切にしていた平和憲法も重要な位置を占めている。

ただ、私が一番印象に残った問いかけは、「石油か食糧か」という二者択一問題である。彼は逡巡することなく「食糧」と言い切るのである。答えは簡単で、食糧なしでは、人間は生きていけないからである。

この当たり前のことが、現在ではなおざりにされている。むしろ正反対の政策が堂々とまかり通っている。たとえば、今年１月１日に発効した日米双方の関税を削減・撤廃する日米貿易協定である。米国からの牛肉の輸入関税は、現行の38.5%から段階的に引き下がり、2033 年度に 9%になる。日本の畜産業は、壊滅的危機にさらされることになる。

二つ目は、「ララ物資」の存在を知ったことである。戦後の食糧援助については、「ガリオアエロア」が有名であるが、「ララ物資」については知らなかった。

戦後の荒廃した日本では、食糧や衣料をはじめとする生活必需品すべてのものが不足していた。そのような時に海外の「ララ」という団体から、たくさんの支援物資が届けられた。これは、

1946 年 1 月に、盛岡出身サンフランシスコ在住のジャーナリスト、浅野七之助によって立ち上げられた「日本難民救済会」からのものであった。

浅野氏は、財産は没収され、敵性国民として集められていた日本人収容所から出たばかりという、わが身の苦境もかえりみず、貧困にあえぐ戦後の祖国を救うべく奔走した。

日本に届けられた「ララ物資」総額は、当時のお金でおよそ 400 億円を超えたが、そのうちの 20%は、日本人、日系人からの善意の贈り物であった。

多数の餓死者も出た貧困の極みの日本を、熱烈な思いを胸に、遠くから支え続けてくれた人達がいたのである。

こうした思いに現代のわれわれは応えているだろうか。説明するまでもなく「否」である。

過去に学び、現状を再認識し、未来に思いを馳せるとき、「食べ物を粗末にしない、勿体ない」という日本古来の食文化を、老いも若きも深く胸に刻む必要がある。

「延命」か「縮命」か

春日台　　松浦　昭

耳慣れない「縮命」という言葉がある。反対語は「延命」である。久坂部羊『オカシナ記念病院』で初めて知った。

ある研修医が東京の最先端大学病院から沖縄の離島にやってきて、離島の岡品（オカシナ）病院で不必要な治療をしない方針に戸惑いながら過ごす 2 年間を 8 話にまとめた小説である。

一般的な医療が努力する延命や治療に消極的であり、延命を望まない島民たちにも程よい医療が風土に合っているようである。

不自然な長生きに警鐘を鳴らし、病気や怪我は治るけど老化は治らないし治すものでもないという主義である。認知症は、昔は耄碌とよばれ治療の対象ではなかった。

作者は『老乱』で、「認知症介護の一番の問題は…ご家族が認知症を治したいと思うことなんです」と。治そうとする思いが逆に患者に過度の負担をかけていると述べている。

オカシナ記念病院がおかしいのか、それとも延命治療に取り組んでいる医療がおかしいのか。オカシナ病院のおかしさから今の医療の問題点を鋭く提起している。

考えてみれば、物事はある方向に突き進んでいくとその先には弊害が生まれてくる。工業化⇒公害、合理化・民営化・効率化⇒格差の顕在化、専門化⇒大局的判断の欠如、そして少子高齢化は

目の前に現実問題として大きく横たわっている。やはりどこかでブレーキをかけ、方向転換や引き返す勇気をもたなければならない。

医療は、これまで延命治療に邁進してきた。多くの成果が生み出されたことは明らかである。しかし医療の現在を見回したとき、徹底的なガン検診での肉体精神的疲弊、終末期医療の無駄な延命等で患者を苦しめている。

縮命とは安楽死でもなく、ましてや殺人でもなく「阿吽の呼吸」で患者にも身内にもいいタイミングで死を迎えさせることである。

たとえば真夜中の 2 時ではなく昼の 2 時であれば、多くの人が駆けつけてお見送りをすることができる。無駄な延命で患者を苦しめることもないであろう。

個人的には最期の迎え方を考えさせられた一冊である。

免許証返納の記

松浦　昭　　（春日台）

75 歳の誕生日を機に運転免許証を返納した。運転も自動車もそれほど好きではなかったので返納することに迷いはなかった。むしろこれで加害者になることはなくなったという安堵の気持ちの方が強かった。

返納証明書の交付をうけ、警察署をあとにして一件落着したと思ったのであるが、予期しない不思議な感情が沸き上がってきた。急に何か大事なものを失ったという寂しさ・名残惜しさである。

考えてみれば免許証は 50 年間以上常に肌身離さず持ち続けたモノである。こうしたモノは私の周辺ではなくなってきていた。もしかしたら最後の貴重なモノであったかもしれない。

「モノには魂が宿る」という考え方があるが、今回の感慨はそれに近いものであり初めての経験である。

事実、これを取得した時の状況まで頭に浮かんできた。当時はモータリゼーションのはしりであり、当然わが家には車はなく免許証も必要なかった。しかし、両親が将来辺鄙な所に就職することを考えて、免許取得を勧めてくれた。今まで忘れていた両親への感謝の気持ちが思い出された。単なるモノの喪失ではなく、精神的な思いが含まれていたことになる。

日本人はすべてのモノ（道具）を大切にし、感謝の気持ちで扱ってきた伝統がある。江戸時代の日本といえば、世界一省エネで、そして環境に優しくモノを大切にする国だった。そして今でも針

供養、人形供養というものがあり、その気持ちをモノに伝えている。最近では入れ歯供養まであるという。

そこで気になるのが最近の風潮である。ビニール傘に代表される使い捨て文化である。年間6500万本のビニール傘が消費されている。一時の便利さの先に、取り返しのつかない環境破壊が待ち受けている。レジ袋の消費量は有料化で減少しているが、ビニール傘については手が付けられていない。

2005年に来日したノーベル平和賞受賞者ワンガリ・マータイさんは、「もったいない」という日本語の意味に深い感銘を受けといわれている。世界各地で環境保護の世界共通語としての「Mottainai」を広め、また訴えられた。それが今では、もったいない文化の日本と、使い捨て文化の欧米という常識は完全に逆転している。

日本人には非常に長い年月をかけて築き上げてきた文化的な「価値観」がある。モノの大切さを今一度心に刻むべきである。

幻の国歌「われら愛す」

松浦 昭　（春日台）

皆さん、幻の国歌といわれた「われら愛す」をご存知ですか。

洋酒の壽屋（現サントリー）の佐治敬三氏が、講和条約発効一周年を記念して1953年に大々的に新国民歌を募り、その呼びかけに応じて集まった歌詞と曲5万点の中から選ばれたのが、「われら愛す」である。

審査員には、堀内敬三、西條八十、サトウハチロー、佐藤春夫、山田耕筰、古関裕而氏等錚々たるメンバーが名を連ねている。

佐治氏は、フランス国歌（ラ・マルセイエーズ）のように自由と平和を愛し、日本の国を愛する我々が希望と誇りを持って声高らかに歌える歌詞を、作曲を広く全国から募り国家の復興にいささか寄与したいと述べている。

発表会は全国12の都市で開かれどこも満員で、NHK ラジオやテレビも盛んに放送するなど当時としてはちょっとしたヒット曲になった。宝塚雪組による「レヴュー“われら愛す”」まで上演されている。

1958年に中学1年生になった私は、音楽の授業でこの曲と出会った。

先生はこの曲が、近いうちに「君が代」に代わり新しい国歌になるかも知れないといわれた。明るく元気の良い、未来に希望を抱かせるこの歌が国歌になれば素晴らしいとその時強く感じた。しかし2学年以降でこの歌を歌った記憶はあまりない。

いま改めて読み返してみると、豊かな自然、自由・平和の大切さ、ロマン・まことまで歌いこんでいる。その語は出ていないが言外に「戦争」はもうコリゴリだと訴えている。書物の副題にもあるように、まさに「憲法の心」が滲み出ている。

しかし壽屋が巨費を投じてラジオ、新聞、レコード、雑誌などあらゆるメディアを駆使して「われら愛す」の普及宣伝に力を入れたが、この曲は数年後には日本の社会からその姿を消して行った。入学が1年遅ければ、私はこの歌と出会うことはなかったであろう。

サントリーの創始者鳥居信治郎氏はその伝記のなかで「曲、詞共に荘重すぎて、遂に国民のものにはなり切らなかった」とその理由を柔らかく述べている。

一方で、文部省は1958年に学習指導要領を改定し、祝日には国旗を掲揚し、「君が代」を斉唱させることが望ましい旨の方針を打ち出した。

おそらくこれが大きな理由であったと思われる。

しかし、完全に消えてしまったのではなく、学校法人玉川学園では戦後ずっと歌い継がれており、同学園での学生、教職員の愛唱歌の一つになっている。

岐阜大学教育学部附属中学校でも、折に触れてこの歌を歌っている。

もしこの時に横槍が入らずに「われら愛す」が国歌になっておれば、その後卒業式に校長が教員の口元をチェックするというような愚行を冒すこともなかったであろう。

また人々は、いつでもわだかまりなく明るく国歌を歌っていたことであろう。

当時の人々の高揚感を感じていただくために歌詞を以下に全文紹介します。

作詞＝芳賀秀次郎
作曲＝西崎嘉太郎
編曲＝高浪 晋一

一、われら愛す
胸せまる あつきおもいに
この国を われら愛す
しらぬ火 筑紫のうみべ
みすずかる 信濃のやまべ
われら愛す 涙あふれて
この国の 空の青さよ
この国の 水の青さよ

二、われら歌う
かなしみの ふかければこそ
この国の とおき青春
詩(うた)ありき 雲白かりき
愛ありき ひと直かりき
われら歌う おさなごのごと
この国の たかきロマンを
この国の ひとのまことを

三、われら進む
かがやける 明日を信じて
たじろがず われら進む
空にみつ 平和の祈り
地にひびく 自由の誓い
われら進む かたくうでくみ
日本(ひのもと)の きよき未来よ
かぐわしき 夜明けの風よ

生井弘明『「われら愛す」―憲法の心を歌った"幻の国歌"』(2005 年)を参照しました。
CD－ROM 付きです。ネットで「われら愛す」と検索すれば、曲も出てきます。